明治初期の文学思想

上巻

柳田泉

著者略歴

明治二七年青森県弘前市に生まる。
大正七年早稲田大学文学部卒業。
現在、早稲田大学文学部教授・文学博士。

主要著書

『明治文学叢刊』（松柏館）
『随筆明治文学』（春秋社）
『坪内逍遙』（河竹氏共著富山房）
『幸田露伴』（中央公論社）
訳書『カーライル全集』（春秋社）

現住所　三鷹市深大寺三九一四番地

明治文学研究　第四巻
明治初期の文学思想　上巻

著者© 柳田泉（やなぎだいずみ）

著者との協定により検印廃止

¥ 1800

発行所　株式会社　春秋社
東京都千代田区外神田二ノ一八
電話神田(291)六五七五・四七一五
振替口座・東京　二四八六一

昭和四〇年三月一〇日　第一刷発行

発行者　神田竜一
東京都千代田区外神田二ノ一八

印刷所　三秀印刷工業株式会社
東京都文京区関口水道町四六

製本所　小林製本所
東京都千代田区神田猿楽町二ノ八

落丁・乱丁本はお取り換えいたします。

N. D. C. 904

はしがきに代えて

ここに、このような題をおいて、いわゆるはしがきの一文を書く用意をしたが、考えてみると、書くべきことは皆本文の中に書いてしまった。またこの本の出来た由来としては、数年来早稲田大学の文学部で講じてきたものというほか、別にいうほどのことはない。強いていえば、この本はもっともっと早く出来る筈であったが、戦争と私の病気でこう遅れたということを言い添えるぐらいであろう。そう考えると、それだけで筆をとめてもよいのであるが、しかし何やら心にかかるものがある。それが秋の空の青々と澄んだのに、どこかに白い雲片が一つ二つ浮かんでいるような気持で、本文は存分に書いてしまったつもりであるのに、どこかに書きもらしたものがあるような気持がする。それが、はしがきを書くかどうするかと、筆をとったまま度々思いめぐらしている中に、ふと浮かび上がってきた。そうして、いわゆるはしがきの代りに、このことを書いておこうかという気になった。それは、こういうことである。

この本の本文で、私は、明治の始めには、時代の文学を、社会構成にもからませて、上の文学、下の文学という見方をしてきた。それが明治の十年以後になって、格別これといった説明もせずに、この上下という表現を大きな文学と小さな文学という表現に代えた。そのときは、格別の説明をしなくても、それでわかるつもりであったが、考え直してみると、読者、殊にこの頃の文学に初めて接する人々には、多少の説明があ

った方がよかったのではないか、そういう気持が、本文を書いてしまってから、いつとなく私の心に動いて来ていたものであろう。今ここで書いておこうと思い浮かんだというのは、このことである。

今もいったように、私は始めは、上の文学、下の文学といった（また場合によって広い文学と狭い文学、実利の文学と風流の文学などともいってある）。これは、本文で述べた通り、漢文学思想からつながってくるもので、それでよい。その上の文学を大きな文学、下の文学を小さな文学と、どうしていうようになったか。始め上の文学と下の文学といったのは、その通り上の文学が下を抑えてきたということ、それが大きな文学、小さな文学となったというのは、上下の差が、明治に入ること深くなるにつれてほぼ平均され、文学がほぼ一つ範囲のものになったが（この間西洋文学の作用がある）、なお目的によって大、小の差があり、それが大よそそのまま、その前の上下の関係を示しているということである。広いといったのも、実乃至実利といったのも、さてはサイエンスといったのも、この大と同じ、狭といったのも、風流といったのも、さては美術といったのも、この小と同じものと見たのである。上下の差の少なくなったということは、戯作家がインテリとなって文壇をもつことになった一方、小説家に法学士、文学士と、学士が多くなったことでもわかろう。しかし上下の差はちぢまっても、すぐに合同したものにはならず、やはり一応、大と、小という形で差別をつづける。或いは一方は権威につながり、他方はそれに背く。また前ほどのはっきりした差別でなくとも、目的上の差別はあることはある。それなら、大と小とは、二つに分かれてしまうかというと、そうはいかない。目標上の差はあっても、同じく現実にもとづき、現実を好くするという点でつながっている（すなわち実と美、この実にも美にも善が入ろう）。二つであって、二つに割れてしまわないのである。この大、小の段取りを経て、やがて離れるものは離れ（学問）、合一するものは合一して、近代日本文学という

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「文学」を形造っていくわけである。上と下といっても、ともに時代の文学であったように、大といい、小といっても、ともに時代の文学であって、まるきり異質とはいえないつながりがある。その辺の事情は、もう本文に詳しく書いておいた筈であるから、ここでは繰り返さない。

それを、本文の中でもう少し際立って説明すべきであったというのが、私の心のどこかに浮かんでいた気がかりであったのである。結局は、わかることと思うけれども、やはりはっきりさせるべきことは、はっきりさせるに越したことがない。そこでこれを、はしがき代りに書いた。

今、明治初めの文学だけをとって、二つに分けて表現すると、読者は異様に思うかも知れないが、それは、今日は「文学」という概念がはっきりきまってしまったからである。その概念のはっきりしない当時では、二つあっても三つあっても別に不思議ではなかった。それは、背景に世界文学の発達をおいて考えると、よくわかることで、世界の文学の源は同源か多源か、それは今論じないことにし、早くから東洋と西洋と分かれてきた。そうして、東洋の文学には、早く上下の差が見え、西洋の文学には大小の範囲が見える。東洋の文学は、歴史と詩歌、西洋の文学はリタラチュアとポエトリー、東洋の歴史、西洋のリタラチュアはやがて学問（サイエンス）の源となる。日本もほぼ同じことで、文学と詩歌、その文学は歴史と学問である。詩歌が風流文学となる。下って、社会構成がはっきりするとともに、文学が、上と下とに、一応ははっきり分かれることになる。徳川文学の歴史がそれを語っている。明治に入って、上の文学、下の文学が、西洋をうけて、次第に大きな文学、小さな文学となり、大きな文学がサイエンスとして勢力を振う一方（明治八年に「家庭雑誌」の論者は、文学（リテラチュール）とはサイエンスなり、百科の学を論ずるの名なり、詩文杯（など）を云ふには非ず云々といっている）、他方では大小平均しつつ、さてその小さな文学が、大きな文学の中から新たに吸

取すべきものを吸取し、新しく西洋から採るべきものをとって、独立をする。この間の動きが、いうところの文学革新であり、その革新の動きの主動者が、大体坪内逍遙その他であるということになろう。したがって、明治初期の文学思想が、この革新の動きを中心とするのは、いうまでもない。これを先駆的動きとして、逍遙の『小説神髄』に入って、この革新が一応自然の結論に落ちつき、落ちつくとともに、新しい力（二葉亭四迷達のそれ）を得てまた一層の近代的な真の革新に向う。

それはしかし、この本のすぐあと、『神髄』の研究で改めて語られる順序であり、読者にはそれを待っていただく。ただ今のところ、以上の上下、大小の文学の説明をざっと終ったので、私の心中の雲片もやっとからりとした気持になった。

はしがきが、いわば本文の延長めいたものになったが、はしがき必ずしも定体なし、これはこれでよいと思うものである。（昭和三十九年十一月十六日、晴日午前中）

柳田　泉

目次

はしがきに代えて

第一部　序　篇……三

第二部　初期文学革新の大勢……三一

第一篇　時勢と文学……三三

1　初期文学革新の骨骼……三四

（一）明治に先立つ文学概念……三四

（二）明治文学の概念……三七

2　文学無用論……四二

（一）時勢と文学……四二

(二) 時勢は文学を無用視する……五五
(その一) 明治政府の実学的動き……五五
(その二) 文学無用の論……六二
3 政府の文芸利用策……六六
(一) 文学無用論より有用論に……六六
(二) 政府の文芸利用策……六七
(三) 戯作脱皮の第一段……七三
4 新聞と戯作文学……八六
(一) 初期新聞一斑……八六
(二) 新聞文学の指標……八九
(三) 大新聞、小新聞の出現……九四
(四) 小新聞と「つづきもの」……九八
第二篇 西洋文学の移入……一一〇
1 移入の歴史と条件……一一〇

2　移入条件の追補……一三〇
3　移入西洋文学の概念及び移入西洋文学知識の範囲……一三〇
4　移入文学と翻訳文学……一四一
5　西洋文学の影響……一五一
第三篇　文学革新の動き……一五五
1　翻訳文学と新作文学……一五五
翻訳文学……一七七
新作文学……一八三
(一)　人情小説……一八四　(二)　歴史小説……一八六
(三)　政治小説……一八九　(四)　社会小説、女性進出小説……一九六
2　「つづきもの」の文学化……一九八
第三部　初期の文学思想……二二七

第一篇　明治十年以前の文学思想……三九
1　福沢諭吉……二三五
2　中村敬宇……一三〇
3　西周と『百学聯環』……二六二
4　明六社のこと……二八〇
5　共存同衆のこと……二八二
6　福地源一郎（桜痴）……二八五
7　成島柳北……二九六
第二篇　明治十年以後の文学思想……三一四
前書き……三一四
1　文学史の始め……三一七
（一）『日本教育史略』……三一八

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

(二)　『文芸類纂』……三二五
(三)　『日本開化小史』……三三〇
(その一)　田口卯吉伝略……三三一
(その二)　『日本開化小史』の内容……三三二
(その三)　日本文学の変遷……三四〇
(その四)　文明史観の出現……三四八
ギゾー『ヨーロッパ文明史』…三五六　バックル『イギリス文明史』…三六〇
ゼルフィ『歴史学』……三六五

2　文学論(広義)……三七三
(一)　末広鉄腸の文学論……三七三
(二)　「郵便報知」の文学論……三八六
(その一)　「日本未ダ文学ナシ」……三八六
(その二)　「文学ノ独立」……三九〇
(三)　井上哲次郎(巽軒)の文学論……三九四
(その一)　文学論(一―二)……三九五
(その二)　「学芸論」……四〇四
(その三)　「寄中村敬宇翁書」……四〇八
(四)　福地桜痴と成島柳北の文章論争……四一三

(五) 文学自由論……四三二
末広鉄腸「干渉ノ弊害」…四三　成島柳北「風流の主義」…四三六
(六) 交詢雑誌「英文学輸入ノ説」……四三八
(七) 植村正久の「文海新潮」……四三七
(八) 読売新聞の「日本の文学」……四四〇
(九) 福沢諭吉「文学会員ニ告グ」……四四四
(一〇) 「小学雑誌」の文学論……四四八
(一一) ある青年の「日本歌」……四五七
(一二) 有賀長雄の『文学論』……四六一

——以上、上巻——

明治初期の文学思想

上巻

第一部序篇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com